能「隅田川」詞章

〻は節を表わす　「は言葉を表わす
※詞章は演出により異なる場合がございます。予めご了承ください。

［名ノリ笛］
〈名ノリ〉
ワキ「これは東国隅田川の渡守にて候。さてもこの渡りは。武蔵下総両国の境に落つる川にて候が。この間の雨に水気に見へて候。大事の渡りにて候程に。旅人の一人二人にては渡し申すまじく候。人々を相待ち渡さばやと存じ候
［次第］
〈次第〉
ワキツレ〻末も東の旅衣。末も東の旅衣日も遥々の心かな
〈名ノリ〉
ワキツレ「これは東国方の商人にて候。我この間は都に候ひて。色々商ひ事終り。唯今本国に罷り下り候
〈道行〉
ワキツレ〻雲霞。あと遠山に越えなして。あと遠山に越えなして。いく関々の道すがら国々過ぎて行く程に。ここぞ名に負ふ隅田川。渡りに早く着きにけり渡りに早く着きにけり
ワキツレ「急ぎ候程に。隅田川の渡りに着きて候。急ぎ船に乗らうずるにて候。いかに船頭殿舟に乗らうずるにて候
ワキ「中々の事船に召され候へ。また後より。人の多く来り候は何事にて候ぞ
ワキツレ「あれは昨日の泊りに有し女物狂にて候
ワキ「さあらば彼を待ち舟にのせうずるにて候。暫く御待ち候へ
ワキツレ「心得申し候
［一声］
〈サシ〉
シテ〻げにや人の親の心は闇にあらねども。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひ白雪の。道行人に言伝てて。行方を何と尋ぬらん
〈一セイ〉
シテ〻聞くやいかに。うはの空なる風だにも
地謡〻松に音する。習ひあり
［カケリ］
シテ〻真葛が原の露の世に
地謡〻身を怨みてや。明け暮れん
〈サシ〉
シテ〻これは都北白河に。年経て住める女なるが。思はざる外に一人子を。人商人に誘はれて。行方を聞けば逢坂の。関の東の国遠き。東とかやに下りぬと聞くより心乱れつつ。そなたとばかり。思ひ子の。跡を尋ねて。迷ふなり
〈下歌〉
地謡〻千里を行くも親心子を忘れぬと聞くものを

〈上歌〉

地謡〽もとよりも。契り仮なる一つ世の。契り仮なる一つ世の。その中をだに添ひもせで。ここやかしこに親と子の四鳥の別れこれなれや。尋ぬる心の果やらん。武蔵の国と。下総の中にある隅田川にも着きにけり隅田川にも着きにけり

シテ「なうなう我をも舟に乗せて賜はり候へ

ワキ「汝は狂女ごさめれ。いづくよりいづ方へ下る人ぞ

シテ「これは都より人を尋ねて下る者にて候

ワキ「たとひ都の人なりとも。面白ふ狂へくるはずは。この船には乗せまじひにて候

シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば。日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ〽形の如くも都の者を。舟に乗るなと承るは。隅田川の渡守とも。覚えぬ事な宣ひそよ

ワキ「狂女なれども都の人とて。名にし負ひたるやさしさよ

シテ「なうその言葉はこなたも耳にとまるものを。かの業平もこの渡りにて

シテ〽名にし負はば。いざ言問はん都鳥。我が思ふ人は。ありやなしやと

シテ「なう舟人。あれに白き鳥の見えたるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ

ワキ「あれこそ沖の鴎候よ

シテ「うたてやな浦にては千鳥とも言へ鴎とも言へ。などこの隅田川にて白き鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ

ワキ〽げにげに誤り申したり。名所には住めども心なくて。都鳥とは答へ申さで

シテ〽沖の鴎と夕波の

ワキ〽昔に帰る業平も

シテ〽ありやなしやと言問ひしも

ワキ〽都に人を思ひ妻

シテ〽わらはも東に思ひ子の。行方を問ふは同じ心の

ワキ〽妻を忍び

シテ〽子を尋ぬるも

ワキ〽思ひは同じ

シテ〽恋路なれば

〈上歌〉

地謡〽我もまた。いざ言問はん都鳥。いざ言問はん都鳥。我が思ひ子は東路に。ありやなしやと。問へども問へども答へぬはうたて都鳥。鄙の鳥とや言ひてまし。げにや舟競ふ。堀江の川の水際に。来居つつ鳴くは都鳥。それは難波江これはまた隅田川の東まで。思へば限りなく。遠くも来ぬるものかな。さりとては渡守舟。こぞりてせばくとも。乗せさせ給へ渡守さりとては乗せて賜び給へ

ワキ「かかるやさしき狂女こそ候はね。急ひで舟に乗り候へ。大事の渡りにてある間。かまひて船中にて物に狂ひ候な。最前の人舟に召され候へ

ワキツレ「心得申し候。いかに船頭殿に申すべき事の候

ワキ「何事にて候ぞ

ワキツレ「向かひに当つて念仏の音の聞こえ候は何事にて候ぞ

ワキ「あれは人の弔ひに大念仏を申され候。あの念仏について。哀れなる物語の候を。この舟の

向かひへ着かうずる間に。語つて聞かせ申し候べし
ワキツレ「さらば御物がたり候へ
〈語リ〉
ワキ「さても。去年三月十五日。や。しかも今日にて候ひしよ。都の人とて年十歳ばかりな幼き者を。人商人奥へ連れて下り候が。この人ならはぬ旅のつかれにや。路次より以ての外に違例し。この川岸にひれ伏し候ひしを。なうなんぼう世には。不得心なる者の候ひけるぞ。今を限りと見へたる幼き人をば捨ておき。商人は奥へ下つて候。さりとも。さりともと思ひしかども。かの人ただ弱りに弱り。既に末期に及び候程に。あまりに痛はしく存じ。古郷を尋ねて候へば。今は何をか包み参らせ候べき。我は都北白河に。吉田の何某と申しし人のただ一子にて候。我が名は梅若丸。生年十二歳になり候。父にはおくれ。母一人に添ひ参らせ候を。人商人これまで連れて下り候。我空しくなりて候はば。この路次の土中に築き籠めて給はり候へ。それをいかにと申すに。誠は都の人の。足手影迄も懐かしう候程に。かやうに申し候。ただ返す返すも母上こそ。何よりもつて恋しく候へとて。弱りたる息の下にて。念仏四五遍唱へ。ついに終つて候。さる程に遺言に任せ墓所を構へ。標に柳を植えて候。今月今日が正命日に相当たりて候程に。所の人寄り集まり。大念仏を申され候。この船中にも少々都の人も御座候ごさめれ。哀れ大念仏を御申し有つて。御弔ひあれかし
ワキ「や。長物語に舟が着きて候。急いで御上がり候へ
ワキツレ「ただ今の御物語に落涙仕りて候。末は急ぎにて候へども。我らも念仏の人数に参り候べし
ワキ「こなたより時節を申さうずるにて候
ワキツレ「心得申し候
ワキ「いかに狂女。舟が着きて候とうとう上がり候へ
シテ「なう舟人。今の物語はいつの事にて候ぞ
ワキ「去年三月十五日。しかも今日に当たりて候
シテ「さてその稚児の年は
ワキ「十二歳
シテ「主の名は
ワキ「梅若丸
シテ「父の名字は
ワキ「吉田の何某
シテ「さてその後は親とても尋ねず
ワキ「親類とても尋ね来ず
シテ「まして母とても尋ねぬよなう
ワキ「いや思ひもよらぬ事
シテ〜なう親類とても親とても。尋ねぬこそ理なれ。その幼き者こそ。この物狂が尋ぬる子にてはさむらへとよ。なうこれは夢かやあら浅ましや候
ワキ「言語道断。さてはその人の母にて御入り候か。今は歎きても甲斐あるまじ。かの人の墓所を見せ申し候べし。こなたへ渡り候へ
ワキ「なうなうこれこそ彼の人の墓所にて候へ。よくよく御弔ひ候へ
〈クドキ〉

シテ〽今まではさりとも逢はんを頼みにこそ。知らぬ東に下りたるに。今はこの世に亡き跡の。
標ばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁とて。生所を去つて東のはての。路の傍の土と
なりて。春の草のみ生ひ茂りたる。この下にこそあるらめや

〈下歌〉

地謡〽さりとては人々この土を。かへして今一度。この世の姿を母に見せさせ給へや

〈上歌〉

地謡〽残りても。かひあるべきは空しくて。かひあるべきは空しくて。あるはかひなき箒木の。
見えつ隠れつ面影の。定めなき世の習ひ。人間愁ひの花盛り。無常の嵐音添ひ。生死長夜
の月の影不定の。雲覆へりげに目の前の浮世かなげに目の前の浮世かな

ワキ〽既に月出で川風も。はや更け過ぐる夜念仏の。時節なればと面々に。鉦鼓を鳴らし勧むれ
ば

シテ〽母はあまりの悲しさに。念仏をさへ申さずして。ただひれ伏して泣き居たり

ワキ〽うたてや人々多くとも。母の弔ひ給はんをこそ。亡者も悦び給ふべけれと。鉦鼓を母に参
らすれば

シテ〽我が子の為と聞けばげに。この身も鳧鐘を取り上げて

ワキ〽歎きをとどめ声澄むや

シテ〽月の夜念仏諸共に

ワキ〽心は西へと一筋に

シテ／ワキ〽南無や西方極楽世界。三十六万億。同号同名阿弥陀仏

地謡〽南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏

シテ〽隅田河原の。波風も声立て添へて

地謡〽南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

シテ〽名にし負はば都鳥も音を添へて

子方／地謡〽南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏

シテ「なうなう今の念仏の中に。正しく我が子の声の聞え候。この塚の内にてありげに候よ

ワキ「我等もさやうに覚へて候。所詮こなたの念仏をば留め候べし。母御一人御申し候へ

シテ〽今一声こそ聞かまほしけれ

シテ〽南無阿弥陀仏

子方〽南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と

地謡〽声の中より。幻に見えければ

シテ〽あれは我が子か

子方〽母にてましますかと

地謡〽互に手に手を取り交はせばまた。消え消えとなり行けば。いよいよ思ひは真澄鏡。面影も
幻も。見えつ隠れつする程に東雲の空も。ほのぼのと明け行けば跡絶えて。我が子と見え
しは塚の上の。草茫々としてただ標ばかりの浅茅が原となるこそ哀れなりけれなるこそ哀
れなりけれ